

っている。交流人口も活動頻度、活動割合同様、直売所が多く、各種イベント、特別漁区の順になっている。

集落の6次化が本格化したため、2014年から直売所に関する活動が増えている。

3 6次化の支援体制と活動

3-1 6次化の支援体制と枠組み

6次化の支援体制を図3に示す。集落の6次化に対する支援は2013年から、大学、民間業者の山際食彩工房、行政によって行われている。行政による支援は2015年から地域おこし協力隊が加わっている。

3-2 3主体による支援内容

3主体による支援内容を図3に示す。全体計画に関して大学が3年間支援している。商品開発は山際食彩工房により2013年、2014年でレシピ指導、2014年2015年から加工指導が行われている。生産は、2014年に一度行政による農業支援が行われた。販売に関してパッケージ作成とイベント時の人的支援を大学が3年間行っている。また、2015年からは協力隊と協働で支援している。

環境整備は2015年に大学と行政が施設整備、山際食彩工房と行政が機材設備に関して支援している。

4 集落住民の意識・役割の変化

たのせ集落の住民21人を対象にアンケート調査を行った。回答数は19人である。調査は、2015年11月28日に行った。アンケート結果を図4に示す。

4-1 6次化に関する意識

現在の集落内の役割はイベント参加、特産品開発に関わっている人が多く、企画・運営、会計は少人数で担当している。また、2つの役割を持っている支援型が多く、次いで参加型、総合型になっている。

6次化を始めてから、現在までに6次化を集落で行っ

ていくことに対しての意識が向上した人は14人と、7割の人が実際に6次化を行うことで意識が向上している。

また、現在、6次化に関わる役割がある人は、およそ半数程度であり女性が多い。

4-2 複数の主体による支援に関する評価

活動しやすくなったと回答したのが一番多い。9割を超える人が複数の主体による支援に満足している。

4-3 大学の長期支援に対する評価

大学が長期的に支援を行ってきたことで、集落がすごく変わったと回答した人が多い。9割を超える人が、長期的に支援を行うことで、集落が変わったと考えている。

また、「活気」「集落内活動」「外部評価」「交流」「自然景観」「直売所」が変わったという意見があった。

5 まとめ

本研究では以下のことを明らかにした。

- ・たのせ集落の活動は、大学の支援によって始まった活動と、集落が自発的に行っている活動があり、現在は直売所運営、6次化が活動の中心となっている。

- ・協働型支援の範囲は広がっている。

- ・3主体によって6次化に関する支援が行われ、主体ごとに支援の内容が異なるが、複数の主体が支援することになっても、住民は活動が複雑化したという意識はない。

- ・6次化を始めたことで住民の意識が向上しており、中でも女性の役割が増加している。

- ・活動が展開していくと、住民の役割が増えるとともに、活動の専門性が高まるので、集落の体制を確認し、全体への支援に加えて、きめ細かい支援が必要となる。

参考文献

1) 黒沼剛他,住民の活動と意識変化に着目した協働型集落支援活動の効果に関する研究-福島県南会津町のせ集落での活動を事例として-,日本建築学会計画系論文集,第76巻,第669号,pp.2109-2116,2011,11



図4 6次化に関するアンケート結果

*芝浦工業大学大学院理工学研究科建設工学専攻 修士課程
**株式会社オリエンタルコンサルタンツ
***芝浦工業大学工学部建築学科 教授・博士(工学)

*Graduate School, Shibaura Institute of Technology
** Oriental Consultants Co., LTD.
***Prof. Depart. of Architecture, Shibaura Institute of Technology